

駄菓子屋で店番

高齢者の住まいが多様化している。「生きがいづくり」や「地域交流」など特色を打ち出す老人ホームや住宅が目立ってきたほか、病弱な高齢者のための「介護医療院」と呼ぶ施設も登場した。選択肢は広がるが、一般の高齢者や家族にとっては複雑でわかりにくい面も強まる。主な住居・施設の概要や費用を知っておき、いざというとき慌てないようにしたい。

千葉県浦安市。住宅街にある「サービス付き高齢者向け住宅(サ高住)」の「銀木犀(ぎんもくせい)」を訪ねると、ここがどういう施設なのかわからなくなる。玄関脇に駄菓子屋があり、子どもたちが頻りに出入りしているからだ。

そして駄菓子屋の店番をしている高齢者がこの入居者であることが驚く。87歳の女性Aは「ここは気に入っている。最期までいたい。店番もできるのはうれしい。とやうたいとほほ笑む。サ高住は入居者が室内で倒れたりしていないかといった安否確認などのサービスを提供する賃貸住宅。普通のワンルームマンション風のところが多く、共用の食堂を備え3食を提供するのが一般的だ。国が2011年に設けた制度に沿って民間事業者が運営する。急速に整備が進み、現在全国で約23万戸ある。

数が増えるにつれ特色を示すサ高住も出てきた。銀木犀もその一つ。麓慎一郎所長は「何でも自由に可能な限り自分でやってもいいこと、地域に開かれた場であることが特色」という。建物内に介護事業所を併設し、近隣の医療機関と提

自分に合う高齢者住宅

健康状態と費用から見た高齢者の住まい・施設(イメージ)

自立・健康 ← 介護が必要

高い

介護付き有料老人ホーム

- 施設スタッフが介護サービスを提供
- 入居一時金 0~1億円超
- 月額費用 10万~30万円

住宅型有料老人ホーム

- 生活支援サービスがある
- 介護サービスは事業者と別契約
- 入居一時金 0~1億円超
- 月額費用 10万~30万円

サービス付き高齢者向け住宅

- 安否確認や生活相談サービスがある賃貸住宅
- 介護サービスは事業者と別契約
- 月額家賃 5万~25万円
- 敷金が必要な場合も

グループホーム

- 認知症の人が対象
- 施設スタッフが介護サービスを提供
- 月額費用 12万~18万円
- 前払い金が必要な場合も



地域の子どもたちも出入り自由(千葉県浦安市の銀木犀)

介護医療院・療養型医療施設

- 介護と医療の両方が必要な人が対象
- 病院スタッフが医療・介護サービスを提供
- 月額費用 7万~17万円



介護と医療が必要な人が対象(埼玉県川口市のはとがや病院)

老人保健施設

- 病院を出た人がリハビリで自宅復帰を目指す
- 施設スタッフがサービスを提供
- 月額費用 6万~16万円

特別養護老人ホーム

- 常時介護が必要な人が対象
- 施設スタッフが介護サービスを提供
- 月額費用 5万~15万円

安い

(注)東京都の「あんしんなっとく高齢者向け住宅の選び方」や高齢者住宅財団の資料などを基に作成。地域や施設により費用などはバラツキがある

要介護度で選択肢広く

携しているの、みとりまで対応できることもアピールする。サ高住は当初、「一人暮らしは少し不安」といった比較的元気な高齢者を想定して始まっただけに、みとりの対応は難しいところも珍しくない。

特色づくりは成功しているようだ。全42室の銀木犀浦安は満杯だ。費用は1人部屋の場合で1日3食付けて月約20万~25万円。ほか

一般的に介護必要度が高まれば「特別養護老人ホーム」や「介護付き有料老人ホーム」、認知症なら「グループホーム」などが適していると考えられる。しかし単

一方、病弱な高齢者はかかる状態での施設を選ばざるを得ない場合もある。国はそういう人たちのための新たな居場所として介護医療院制度をつくった。

同病院によると、「別の病院から退院を迫られたものの、家族に頼らず自宅に戻ることができないといった人が病院の紹介で入るケースが大半」という。かか

に日常生活費、医療費、介護費などにも必要になる。10月12日、東京都内で優良な高齢者住宅を事業者の団体が選ぶ「リビング・オブ・ザ・イヤー2018」があつた。大賞を獲得したのは入居者に仕事先の場を提供する介護付き有料老人ホーム。最終選考に残った施設には「生きがいづくり」「地域との交流」を打ち出す例が目立った。

配慮して4人部屋でも1人当たりのスペースは広め。スペースとスペースの間はついたてで仕切っている。ここに入るのはからだが弱ったり認知症になったり

弱ったり認知症になったり食事や入浴、排せつなどで介護が必要になっていく。経管栄養、たんの吸引などの医療処置も欠かせない高齢者。途中で退院を求められることはなく、最期までいることができる。

現時点ではまだ数は限られているが、「近い将来、全国で10万ベッドほどに増える」と(日本介護医療院協会の鈴木龍太会長)ともみられる。数が増えれば特色を出す施設も増えるだろう。そうすれば高齢者やその家族が選んで入る場合も出てくるかもしれない。

からだの状態や意欲、希望などによって高齢期の住まいは様々に広がる。とはいえ住み替えて最も重要なのはやはり「立地と費用」(田村社長)。

「本当に住み替えが必要なのか考えたい」(高齢者住宅財団の落合明氏)との声もある。介護保険サービスなどを使えば不安があつても一人暮らしが可能になることもある。なんといつても自宅で暮らせば費用はぐっと抑えられる。シニアライフ情報センターの池田敏史子代表は「このところ都市再生機構(UR)など公的な賃貸住宅も注目されている」という。まだ元気な人がいったん自宅を片付け生活をコンパクトにして老後に備えるのに適しているそうだ。サ高住などに比べ費用もかからないし、部屋も広い。いすれにせよ早め早めに情報を集め、どこでどう暮らすかを考えておきたい。(編集委員 山口聡)